

# 朝鮮通信使の廃絶と中井竹山

— 徳川中期に見る日本的華夷思想 —

葛本 一雄

1. 序 論
2. 朝鮮通信使の推移
3. 日・朝両国の国内事情
4. 中井竹山の華夷（中華）思想
5. 松平定信との接触
6. 結 論

キーワード：華夷思想・草茅危言・日本書紀・松平定信・対馬

## 1. 序 論

朝鮮通信使というのは友好親善の名目で朝鮮からわが国に派遣された使節団のことである。その最初の来日は1404年、室町幕府の第4代將軍足利義持の時まで遡ることができる。室町時代を通じて彼我それぞれ20数回の使節交換が行なわれているが、豊臣秀吉の2度にわたる朝鮮出兵（1592—1598年）によって通信使は中断された。これが復活するのは徳川家康が征夷大將軍に任ぜられて4年後の1607年（慶長12）のこ

とである。以来、1811年（文化8）まで、江戸時代を通じて前後12回の朝鮮通信使が来日している。

本稿で取り上げるのは、この江戸期における朝鮮通信使の問題であり、特にその最終回の通信使に焦点を置きたいと思うのである。

この最終回の通信使は1811（文化8）に正使・金履喬、副使・李勉求、総勢336人。徳川家齊が第11代將軍に就いたのを祝賀する名目で来日している<sup>(1)</sup>。

しかし、この第12次通信使一行に対する徳川幕府の処遇は極めて簡潔かつ非礼であった。それまでの通信使は、いずれも江戸へ招聘し手厚い歓待を施したのであって、ただ第2次通信使（1617年＝元和3）だけが伏見行札になって江戸へは招かれなかった。

しかも、問題の第12次通信使は徳川家齊の將軍職襲職祝賀を名目としておりながら、実際に来日したのは、家齊が將軍になってから24年が

(1)朝鮮通信使年表（上田正昭著『朝鮮通信使』1995年、明石書店）

年次	正使	副使	従事官	人員
①1607	呂祐吉	慶暹	丁好寛	467
②1617	呉允諫	朴梓	李景稷	428
③1624	鄭崧	姜弘重	辛啓榮	300
④1636	任統	金世濂	黄屎	475

⑤1643	尹順之	趙綱	申濼	462
⑥1655	趙珩	俞瑒	南竜翼	488
⑦1682	尹趾完	李彦綱	朴慶俊	475
⑧1711	趙泰億	任守幹	李邦彦	500
⑨1719	洪致中	黄璿	李明彦	475
⑩1748	洪啓禧	南泰耆	岨命采	475
⑪1764	趙曦	李仁培	金相翊	472
⑫1811	金履喬	李勉求		336

経過した時期であった。

そして、この第12次使節団をもって朝鮮通信使は廃絶となり、明治維新に至るのである。

徳川時代を通じて最大の国際行事であり、豪華な接待内容を内外に誇っていた朝鮮通信使の接受が何故にここで廃絶されたのであろうか。

その理由としては日・朝両国において、それぞれ切実な問題があったと考えられる。

日本の立場としては

- ①相つゞ江戸の大火
- ②米の凶作による社会不安の続発
- ③幕府の財源が困窮してきた
- ④欧米列強が開国通商を要求してきた
- ⑤通信使接受の意義薄れる
- ⑥日本的華夷思想の勃興

などがある。朝鮮側にも種々の理由がある。これら諸問題について逐次述べて行くこととするが、特に大きな理由として注目しなければならないのは江戸時代を通じて勃興してきた⑥の日本的華夷思想（中華思想）である。

日本書紀の神功皇后関連の記事内容をそのまま自己の朝鮮観とした大坂の儒者・中井竹山は朝鮮を古来、日本の属国と見ており、そのような「辺境の小国・朝鮮」から来る使節団に対する過重な接待をやめるべきだと強調し、使節団の行動に対して細かく不信の眼を向けている。その視点に立ってまとめた著書『草茅危言』を直接、幕府に提出した。朝鮮通信使の接受の簡略化、そして廃絶へと進む政策に大きな影響力を与えることとなったと思うのである。小論ではこの中井竹山の所論にスポットをあてながら、朝鮮通信使廃絶への道筋をたどってみたいと思

うのである。

## 2. 朝鮮通信使の推移

江戸時代の朝鮮通信使の第1次派遣は1607年（慶長12）、呂祐吉を正使に、慶暹を副使にして総勢467名の大陣容で来日した。豊臣秀吉の朝鮮出兵によって杜絶していた日・朝国交を回復し自らの存立を死守しようとした対馬藩の画策が功を奏して<sup>(2)</sup>実現したものであり、秀吉の死去により在朝鮮の日本将兵が引揚げてから9年目に実現した国交回復であった。

対馬藩の画策というのは、国交回復を求めた徳川家康名の国書を偽作して朝鮮へ送致したことであり、戦乱にまぎれて朝鮮国王の墓をあばいた豊臣軍の犯人2名の引き渡しを求められていたので、これを在対馬の罪人によってデッチ上げ、偽造国書とこの兩名の「犯人」を朝鮮側の求めに応じて差し出した一連の行動をいう。これによって侵略の「謝罪」を要求する朝鮮側の顔を立て、また国交回復を切望する徳川家康の願いをもかなえることができたのである。

家康は国交、貿易の復活を強く望んでいながらも、朝鮮に対して戦乱の謝罪を公式に行なう気配は示さなかった。国交断絶のままに放置すれば対馬藩はそれまで経済的に朝鮮に大きく依存していた自立が困難になる。切羽詰まった対馬の欺瞞外交手段が成功して、第1次朝鮮通信使の派遣が実現したのである。

朝鮮側はこの第1次通信使に対して「修好」と「回答兼刷還」の使命を与えている<sup>(3)</sup>。

「修好」というのは秀吉の侵略出兵の後の両

(2)1600年に対馬藩が日本国王源家康の国書を偽造し、印章も偽作して朝鮮に送った。朝鮮側はこの国書を疑いながらも通信使を日本に派遣した。

葛本一雄「將軍使を派遣した対馬」(『今昔騙し談義』

1993、大阪経法大出版部)。田代和生『書き替えられた国書』昭和58、中央公論社。

(3)注(1)の表を参照。

表①

通信使 来日年次	事由	経過年数
一六〇七	第一次（修交回答兼刷還）	二年
一六一五	大坂夏の陣	二年
一六一七	第二次（大坂平定祝賀 回答兼刷還）	二年
一六二三	家光襲職	一年
一六二四	第三次（家光襲職祝賀 回答兼刷還）	一年
一六三六	第四次（泰平祝賀）	一年
一六四一	家網誕生	二年
一六四三	第五次（家網誕生祝賀）	二年
一六五一	家綱襲職	四年
一六五五	第六次（家綱襲職祝賀）	四年
一六八〇	綱吉襲職	二年
一六八二	第七次（綱吉襲職祝賀）	二年
一七〇九	家宣襲職	二年
一七一〇	第八次（家宣襲職祝賀）	二年
一七二六	吉宗襲職	三年
一七二九	第九次（吉宗襲職祝賀）	三年
一七四五	家重襲職	三年
一七四八	第一〇次（家重襲職祝賀）	三年
一七六一	家治襲職	三年
一七六四	第一一次（家治襲職祝賀）	三年
一七八七	家斉襲職	二四年
一八一〇	第二二次（家斉襲職祝賀）	二四年

国の国交修復のことを意味しており、「回答」というのは対馬藩が家康を僭称して朝鮮に送ったニセ国書に対する回答の意味である。また「刷還」というのは朝鮮の戦乱に乗じて拉致され、日本に連行された兵士および民間人の返還を求める、という意味である。

第2次通信使（1617年）にはこの「回答兼刷還」のほかに徳川氏の日本統一<sup>(4)</sup>を祝って「大坂平定祝賀」の使命が付加されていた。この第2次通信使は豊臣氏が滅亡した大坂夏の陣から2年後、家康死去の翌年に当たっている。

第3次（1624年）には、まだ「回答兼刷還」の名目については、新たに「徳川家光襲職祝賀」という使命が添えられている。

第4次以降はこの「回答兼刷還」はなくなった。派遣の名目は専ら新将軍の襲職祝賀、および世子誕生祝賀ということになった。

この通信使派遣には、まず徳川幕府が派遣の要請を対馬藩を通じて朝鮮側に送る。朝鮮は宗主国である中国清に1歳2貢、即ち1年に2回、朝貢の使節団を派遣しなければならないので<sup>(5)</sup>、それを勘案しながら日本への通信使派遣の時期

および規模を決定していたのである。

以上で概略、朝鮮通信使派遣の経緯およびその意義を述べたつもりであるので、以下、標題の本論に入りたいと思う。

まず表①を見ていただきたい。

この表は、朝鮮通信使の派遣要請を必要とする事情が生じてから、何年たって通信使が来日しているか、という「経過年数」を示した表である。派遣要請が必要になる事情というのは、すでに述べたように、例えば新しく将軍が就任したとか、將軍家に後嗣が誕生した、などという場合である。

この表を一覧すると、その「経過年数」は、通信使12回のうち11回までが1年—4年である。この「経過年数」はそのまま徳川幕府と朝鮮との間の「密接度」と呼ぶことができる。即ち「経過年数」が短いほど両者の外交接触の必要度が高かったと見るべきであろう。

この「密接度」が一番緊密であったのは第3次（1624年）で、その「経過年数」は1年であ

(4)1615年（元和元）、徳川家康は大坂城を陥し豊臣氏を滅亡させた（大坂夏の陣）。

(5)陳舜臣、第6巻「清朝二百余年」（『中国の歴史』講談社、1966）

る。つまり家光が将軍職に就任したその翌年に、それを祝賀する朝鮮通信使が早々と来日しているのである。

次に、その「経過年数」が2年の場合をあげてみると、

- ①家康が豊臣氏を滅亡させた（大坂夏の陣）時の「平定祝賀」の使節＝第2次（1617年）
- ②家綱が誕生したときの「誕生祝賀」の使節＝第5次（1643年）
- ③綱吉が将軍職に就いたときの「襲職祝賀」の使節＝第7次（1682年）
- ④家宣が将軍職に就いたときの「襲職祝賀」の使節＝第8次（1711年）

以上のほかの場合も一例を除いて「経過年数」3－4年以内に祝賀の通信使が来日している。

ただ一つだけ例外となっているのが、最後の第12次通信使、即ち将軍家斉の時である。将軍職についてから実に24年の歳月を経過して、やっとその襲職祝賀の通信使が来日した、ということである。

この「空白の24年間」および「以後は廃絶」となる理由については、先に序論において6つの項目をあげてみた。勿論これは日本側において考えられる理由であって、朝鮮側にも派遣にブレーキをかける要因があったはずである。

日本的華夷思想の問題に触れる前に、これら日・朝両国における諸要因について簡単に述べてみたい。

### 3. 日・朝両国の国内事情

#### ① 日本の場合

##### a. 相つぐ江戸の大火<sup>(6)</sup>

家斉が将軍に就任する前年の、1786年（天明6）1月に大火があり、ついで1794年（寛政6）1月、1806年（文化3）3月、1809年（文化6）1月

と続いている。家斉将軍の前後22年間に実に4回の大火が江戸を襲っている。江戸の象徴的災害は火災であり、1590年（天正18）以来、幕末までに1,800件の火災が記録に残っている。年平均7件の割合で発生している勘定になる。

特に家斉の時期は、次に述べる天明の飢饉と重なって社会不安の大きな原因の一つとなっていた。

##### b. 天明の飢饉・社会不安

この天明の飢饉は享保の飢饉、天保の飢饉とならぶ江戸時代の3大飢饉の1つである。特に1783年（天明3）と、家斉就任の前年である1786年（天明6）がひどかった<sup>(7)</sup>。

飢饉は東北地方太平洋岸、北関東で猛威をふるった。津軽藩では1783年9月から1784年6月にかけて領内人口のうち8万1,100人余が死亡、八戸藩では6万5,000人のうち3万余人が餓病死している。

この飢饉に端を発して一揆・打毀しが続発し、天明期は江戸時代を通じて都市騒擾が最多発した時期であった<sup>(8)</sup>。天明期を通じて起きた都市

(6)小笠原一男編『日本史小年表』東京大学出版会、1964

(7)『日本大百科全書』3、小学館、1995

(8)上同16

騒擾件数は107件、そのうち69件が打毀しであり、残りの大半も打毀し未遂事件であったとされている。

中でも1783年(天明3)には17件、家斉が就任した年である1787年(天明7)には44件の打毀し事件があった。この年の騒擾は江戸、京都、大坂をはじめ長崎から岩槻(埼玉県)まで、九州から関東に及ぶ広範囲に波及している。

### c. 幕府の財源難

通信使の派遣および接受にともなう費用の問題は日・朝両国に共通する問題である。

日本の場合をみると、新井白石(1658-1725)は1回の通信使の接受に要する費用は60万両ないし100万両<sup>(9)</sup>と計算している。400人前後の使節団が半年から11か月にわたって滞在するのであるからその費用が高むのは当然である。その費用は通信使が通過する沿道の諸大名および徳川幕府が負担する。沿道諸大名は費用捻出のため、いきおい百姓に対して苛斂誅求にならざるを得ず、そのため百姓一揆に発展した事例も見られる<sup>(10)</sup>。

徳川幕府は成立以後、年を追って財政事情が逼迫していた。新井白石の計算によると、1601年(慶長6)から1647年(正保4)までの約100年間に日本から海外へ流出した財貨は次のようになっている<sup>(11)</sup>。

金……71万2,800両

銀……112万2,687貫目

銅……22億2,899万斤

上の数字は長崎奉行所の報告書に基づいたものであり、これ以外に対馬の対朝鮮、薩摩の対中国(明)貿易による金銀銅の流出がある。

これらの数字は直接、通信使接受の費用ではないが、幕府財政が窮迫していたことは事実である。新井白石は自ら朝鮮通信使の第7次(1682年=天和2)、第8次(1711年=正徳元)および第9次(1719年=享保4)に関与しており、財政面から通信使接受の供給のブレーキ役になっていたことは事実である。

### d. 欧米列強の開国強要

鎖国政策実施以来、はじめてわが国に通商要求のため来航した外国船はロシアであった。1792年(家斉就任から5年目)9月、アダム・ラクスマン<sup>(12)</sup>が日本人漂流者である幸太夫<sup>(13)</sup>らをつれて根室に現われ通商を要求した。幕府は鎖国中であることを伝え、この要求を拒否した。幕府はその年11月に海边防備の強化を指令している。しかし、ロシアは諦めず、1795年(寛政7)に再び蝦夷地に来航し、日本船の貨物を強奪し、近辺を荒らし回った。1804年(文化元)にロシアは正式に使節レザノフ<sup>(14)</sup>を長崎に派遣して通商を求めた。

1796年(寛政8)にはイギリス人ブロートン<sup>(15)</sup>が室蘭に来て通商を要求し、その翌年の1797年

(9)宮崎道生「対鮮外交の基本方針と使節待遇の眼目」(『新井白石の研究』吉川弘文館、昭33)

(10)上田正昭『朝鮮通信使』明石書店、1995

(11)宮崎道生「金銀流出についての白石の推算」(『新井白石の研究』吉川弘文館、昭33)

(12)A. Kirillovich Laksman (1766-?) ロシア最初の日本派遣で、1792年に根室に来る。

(13) (1741-1828) 江戸時代の漁師。1782年アリューションのアムチトカ島に漂流。ロシア皇帝エカテリナ2世

に謁見、帰国の許可を得てラクスマンとともに来日。ロシア見聞が『漂民御覧之記』『北槎聞略』にまとめられた。

(14)N. Petrovich Rezanov (1764-1807) ロシアの世界就航船 Nadezida で長崎に来る。

(15)W. Robert Broughton (1762-1821) イギリス人。1796年に Providence 号で室蘭に来る。その著書『北太平洋発見航海記』には日本、朝鮮、琉球、蝦夷の言語を採録している。

にもやって来た。

また1803年（享保3）にはイギリス船とアメリカ船がともに長崎に来ており、1808年（文化5）にはイギリス船が通商を拒絶された腹いせに長崎港に乱入するという事件が起きている。

この事件は最後の通信使になる第12次使節団の一行、336人が対馬聘礼だけで打ち切られ、江戸に至らずに帰国したその3年前の出来事である。

#### e. 通信使接受の意義

総勢400-500人の通信使一行を大坂から陸路で江戸に向かわせ、それを江戸城において謁見する、という大ページントは徳川幕府初期にあっては効果が大きかった。幕府の権勢を内外に示す絶好の機会であった。朝鮮通信使とは別に琉球王国から来日する使節団もあり、この2つの使節団を2つとも、あたかも徳川幕府に服属朝貢する使節のごとく扱い内外に幕府の威儀を示したのである。

しかし、この大イベントも回を重ねるにつれて慣例化して精彩を欠くようになり、あわせて前述したように莫大な経費の支出に悩まされることになった。

### ② 朝鮮の場合

#### a. 天主教の浸透

この「空白の24年」の時期、朝鮮では天主教をめぐる争乱が続発していた<sup>(16)</sup>。伝統的に正教としていた儒教を無視して「毀祠廢祀」の風習がひろがりはじめていた。18世紀の半ばに最初

の洗礼受礼者が出てから信者は増加の一途をたどった。

1791年、即ち家齊が就任してから4年後に、国王正祖は外国渡来の「邪宗」をきらって政府書庫・弘文館所蔵の西洋図書を残らず焼却する命令を出し、天主教を「無君無父之邪教」と断定し、有力信者2名を処刑した<sup>(17)</sup>。

さらに1801年、即ち「空白の24年」の10年目に当たる年に「辛酉教難」と呼ばれている天主教大弾圧事件が起きている。国王純祖はこのとき信者10名を死刑、流罪に処している<sup>(18)</sup>。

「空白の24年」に関連する天主教弾圧事件はこの「辛酉教難」までであるが、この後、1839年の「己亥教難」事件へと発展し、ついにフランス人司祭J・H・シャルタンら3名と、朝鮮人信者80名が死刑に処せられるという結果になる。さらに大院君李昰応のときには「丙寅大弾圧」(1866年)となり、フランス人宣教師12名が処刑された。これを怒ったフランスは軍艦を派遣して江華島を攻撃するという宗教戦乱にまで発展するのである<sup>(19)</sup>。

#### b. 北方から来る危機の消滅

朝鮮が前後12回にわたる朝鮮通信使の歴史の中で、最も厳しい国難に見舞われたのは第4次(1636年)の時であった。

朝鮮半島の北、満洲の地に興った大金(後の清)はすでに17世紀の初頭には満洲地方をほぼ制圧していた。太祖・奴兒哈赤(ヌルハチ)の子の太宗・皇太極(ホンタイジ)はこの1636年4月、国都興京で天地に祭告して即位の式をあげ、国号を大清と命名した<sup>(20)</sup>。

(16)姜在彦「儒教の中のキリスト教問題」(『朝鮮の攘夷と開化』平凡社、1977)

(17)上に同じ

(18)上に同じ

(19)上に同じ

(20)陳舜臣『中国の歴史』6、講談社、1996

この式に列席した朝鮮の使節2名、羅徳憲と李廓は拝礼をしなかった。各地から奉賀使節が集まったが即位式に拝賀しなかったのはこの2名だけであった。

朝鮮はその即位式の9年前、1627年にホンタイジ軍の侵攻を受けて降伏し、「兄弟の国」の盟約を結んだが、もともと朝鮮は中国・明の冊封を受けている国であるから大清の即位式には拝賀を拒否したのである。

その年の11月、10万の大軍が朝鮮半島に侵入(第2次朝鮮攻撃)し、漢江を渡ってソウルを占領した。

朝鮮国王・李倧は南漢山城に逃れたが、ホンタイジの大軍は南漢山城を包囲、李倧は江華島に逃れたが捕えられ、ホンタイジに降服した<sup>(21)</sup>。

このような苦難の1636年であったが朝鮮側は「泰平祝賀」という名の第4次通信使を日本へ派遣している。正使・金世濂、副使・黄屎で総勢は475名。

朝鮮にとってはこの年は存亡にかかわる大きな国難の年であった。そのような危機の時期にあえて朝鮮通信使を日本へ派遣した、ということは日本との連携によって北から来る脅威に対抗しようと考えたのであろう。日本の国力が大きければ大きいほど、北の満洲からの圧力に反発する力になり得たと思うのである。

しかし、「空白の24年」のころになると、最早、北方の満洲勢力は朝鮮にとって脅威ではなかった。清の冊封国となった朝鮮は安泰であり、1年2貢をつとめる朝貢国であり、日本を「うしろ楯」とする必要性も薄れていた。

そもそも朝鮮が日本との復交に取り組み、第1次通信使を派遣して来たその真意の中には北

方の脅威を多分に意識していたと思うのである。

ホンタイジの父の清の太祖・ヌルハチは豊臣秀吉の死去により日本将兵が朝鮮から撤退するころには、すでに全満洲に覇を唱えていた。その精兵が、いつ朝鮮になだれ込んで来るか、朝鮮はおびえていた。

この北からの脅威に対抗し、南の日本と手を組むことにより無言の反撥を北に対して与えるため、朝鮮は毅然としない日本からの復交要求に応諾を与え、通信使の派遣にふみ切った。

それと同時に、日本が再び秀吉のごとき外征の軍を朝鮮に差し向ける可能性があるかどうか、それを探る目的もあって、朝鮮は本意ながら日本との国交回復を図ったのである。しかし回を重ねた通信使の眼に、日本が再び外征の軍を興す危険性は、最早写ることはなくなっていたのであろう。

#### 4. 中井竹山の華夷(中華)思想

本論に入ろう。以上、長々と述べてきた内容は「空白の24年間」およびそれ以後の「廃絶」を生み出したと思われる社会的、政治的事情ではあるが、いずれも決定的な要因ではない。江戸期の文芸復興の波に乗って一般市民の間にも普及した「日本的優越感」「日本の中華思想」こそ大きな影響を与えた決定的要因であり、その一方の旗頭は中井竹山であった。

中井竹山(1730-1804年)は大坂の官許の儒学塾・懐徳堂の第4代塾頭である。この懐徳堂は本来、大坂の町人のための儒学塾であり、その経営は大坂の5人の大商人である鴻池又四郎(山中宗吉)、道明寺屋吉佐衛門(富永芳春)らによって行なわれていた。特定の儒学派に片寄

(21)陳舜臣『中国の歴史』6、講談社、1996

らず「いやしくも疑うべきものあらば、すなはち朱(子)説といえども、これをとらず。しかるにその大本緊要は、すなはち朱(子)説に依拠す」という学風であった。朱子説を建前とするが、もし疑わしい個所があれば、たとえ朱子説であっても、それは採用しない。他の陽明学説とか古学説に基づいて考えて行く。しかし、勉学の根本義は朱子説に従う、ということである。1つの学説にこだわらない、という、いかにも大坂町人らしい学風は塾祖・三宅石庵(1665-1730年)以来のものであった<sup>(22)</sup>。

この官許の懐徳堂を「官立」の学塾に格上げしてもらうため中井竹山は精力的な運動を続けるかたわら、自ら学び、自ら体得した経世済民論を整理して、1791年に『草茅危言』全5巻を完成した<sup>(23)</sup>。

この著書は「国王の事」にはじまり、「参観交替の事」から対外交渉、日常社会の「米相場」の内実、「馬力仲使」や「捨子」に関することまで23項目にわたってまとめてあり、当時としては第1級の経世書といわれている。

この『草茅危言』の中で、今回特に取り上げようと思うのは第2巻の「朝鮮の事」の項目である。

この「朝鮮の事」は総字数が3,000字余りの短い文章であるが、その内容は、

- ① 朝鮮に対する属国史観
- ② 朝鮮通信使文人への不快感
- ③ 愚弄される日本人への蔑視
- ④ 通信使の行列標識への不快感
- ⑤ 使節接受の経費に対する苦言

の5つに分類することができる。

まず①の朝鮮属国史観からはじめよう。

『神功の遠征已来、韓国服従朝貢し、我属国たること、歴代久しく絶ざりしに、今は是に異なり、その故は御当家の初め、豊公流武の局を結び、一時の権を以て、隣交を修め玉ひし御ことなれば、渠も已前の如く我皇京に朝貢するには非ず、たゞ好みを江都に通ずるのみなれば、属国ともしがたく、聘使を待に、客礼を以せざること能はず、豊家に由なき兵端を開かれしゆへ、止ことを得ずしてかゝる となりたるものなり』(原文のまま)

《神功皇后が韓国を遠征して以来、韓国は日本に服従し、朝貢し、日本の属国であること、すでに久しく続いている、ところが現在の、韓国に対する日本の様子は少し異常である。その理由を考えてみると、徳川幕府のはじめ、(家康が)豊臣秀吉の外征のあと始末をし、とにかく一時も早く交隣修交を実現しようとして朝鮮通信使を迎えることになったのだ、だから韓国側も以前の如く日本の都(京都)に来て朝貢するのではなくて、ただ修交の目的で江戸へやって来るのである。それを属国のときのように扱うこともできず、客礼をもって使節に対しては。豊臣秀吉が理由なき外征の戦端を開かれたために、このようなことになったのである》——現代訳筆者

『(韓人の入貢は)上古は八十船の歳貢を修め、鞭撻の誓を守りし属国なれば、かくあるべきことなり、これを国家の大体とす、されども喪乱を歴て乾綱頽廢し、皇威衰絀に就たれば、再び右の跡をたどるべくもあらぬやうになり来り、物換り星移り、当御代に及んでは、前代の過挙を彌縫せさせ玉ひ、好を修め俘を還し、韓国の山河残破の

(22)小堀一正『近世大坂と知識人社会』清文堂、1996

(23)中井積善『草茅危言』京都「皇都」近江屋佐太郎、



後をして、枕を高くして臥の日あらしめ玉ふは深仁厚沢渠もまた心に銘すべし、さて絶域の韓人をして、万里梯航して来らしむるは御代の御威光、寔にめでたきことなれども、古を以考ふれば千戴属国たる小夷なるを、時とは云ながら、隣交を以杭礼せしむること、十分の素望には非ざるものあり、これ対州切の簡便の策の由て起る所なり』(原文のまま)

《上古朝鮮は(神功皇后に降服したとき約束したように=日本書紀)毎年、八十隻の朝貢船を日本に派遣し、朝鮮の王は日本の天皇の馬飼いとなり馬のムチ、クシを献上する(=日本書紀)約束を守ってきた属国であるから、このように入貢の儀礼を守るのは当然であり、これを国家の大きな建前としている。けれども争乱を経てもろもろの「しきたり」も頽廃し、皇威も衰えたことだから、再び上古のように歳貢を守らせることはできなくなった。徳川の代になって豊臣秀吉の暴挙を徳川将軍があと始末し、修好して捕虜をかえした。韓国の山河が戦乱によって荒れはてているが、その人民が枕を高くして寝ることができるのは天皇(将軍)の深い仁慈、厚い恩沢のおかげであり、韓人たちもこのことを肝に銘ずべきである。さて、遠く離れた辺境の地の韓人が万里波濤を越えてやって来るのは徳川将軍の御威光であり、まことに有難いことではあるが、昔のことを考えれば、千年万年の属国である小国朝鮮を、時勢とはいいながら、友好親善の礼をもって接待するのは、本来わが方の望むところではない。対馬で朝鮮通信使の接待を打切るという簡便の策が出るのは、以上のような理由からである》——現代訳筆者

この2つの記事は中井竹山の『草茅危言』「朝鮮の事」の核心をなす部分である。2つとも日本書紀の神功皇后摂政前年紀・冬十月条<sup>(24)</sup>の、所謂「三韓征討」の記述を、そのまま無批判に取り入れて自分の意見としている。

上の日本書紀の「神功皇后摂政前年・冬十月紀」によれば神功皇后は夫・仲哀天皇なきあと、神から啓示を受けた。即ち、

「われを祀れば宝の国・新羅を、刀に血塗らずして服属させることができる」

という指示にしたがって神を祀り「三韓」征討の軍を起こした。

九州を船出した皇后の軍団は、果たせるかな天佑神助を得て海上を滑るがごとくに進み、新羅の海岸に到着した。

それを望見した新羅王は、

「日本の国から天皇の神兵がやって来た。刃向ったところで到底勝ち目はない<sup>(25)</sup>」

といい、平身低頭して無条件で降服した。

神の予言のごとく、皇后は刀に血塗らずして新羅を討ち従えることができた、と日本書紀は書きしるす。

日本書紀の欺瞞に満ちた筆先はさらに進む。

新羅王は日本天皇の馬飼いの下僕になることを契い、毎年、馬の櫛と鞭を贈ること、属国となった証として、年々、船八十艘に貢物を満載して献上すると約束。この約束は、

「たとい太陽が西から昇るようなことが起ころうとも、アリナレ河(洛東江)が下流から上流へ逆流するような世の中になろうとも、また川原の砂が空へ舞い上がって星になるような事態が生じようとも、絶対に違えることはない<sup>(26)</sup>」

(24) 新村出・他監修『日本書紀二』朝日新聞社、昭28

(25) 吾聞東有神國、謂日本、亦有聖王、謂天皇。必其國之神兵也。豈可拳兵以距乎

(26) 非東日更出西、且除阿利那礼河返以逆流、及河石昇爲星辰、而殊闕春秋之朝、忍廢梳鞭之貢、天神地祇、共討焉。

と、新羅王にいわせている。

百済も高句麗も神功皇后の威勢に恐れをなして、戦うことなしに皇后の軍門に降った、と日本書紀の筆は意気揚々と進むのである。

この日本書紀のウソの記述、荒唐無稽ともいふべき近隣国蔑視の“作り話”は、しかし、その後の日本人——中井竹山をも含め——の数多くの思想的指導者の朝鮮史観をゆがめ、その害毒は現在にまでも及んでいると考えるのである。

このように歪んだ史観に染まった中井竹山にとって朝鮮通信使は、あくまでも「元属国」から到来する「朝貢」の使節団であった。そういう史観をもってながめると、通信使一行の中の文人の、ちょっとした横着な振舞いにも目に余る腹立たしさを感じたであろうし、そんな朝鮮文人らに群がって文芸添削を受け、雀喜している日本人に無性に憤りを覚えたのであろう。

竹山の「朝鮮の事」を続けよう。②の通信使文人への不快感、③の愚弄される日本人への蔑視。

『韓使は文事を主張するゆへ、随分文才に秀たるを撰みてさしこすと見へたり、故に沿道客館にて、侯国の儒臣と詩文贈答筆談のこと多し、この方の人多き中には、文才の長ぜぬもありて、我国の出色とならぬもまゝ見へて残念なり、それはさてをき、又三都にては、平人までも手寄せあれば、館中に入て贈答するに、官禁もなければ、浮華の徒先を争て出ることになり、館中雑沓して市の如く、辣文悪詩を以て韓客に冒触し、その甚しきは一向未熟の輩、百日も前より七律一首やうやう荷ひ出し、一篇の和韻を得て終身の榮として人に誇るなど、笑ふべし、かかることなれば韓客は諸人を蔑視し、数十篇の詩を前に積みおき、筆に任せてこ

れを和するに、その中に声律ちがひ、韻のまちがひたるやうの詩あれば、墨を付て投出し返すを、広坐の内よりにじり出て拾ひとり、懐中して退くなど、見苦しきことの限りなかるべし』(原文のまま)

《朝鮮通信使は文事を重く見るのでかなり文才の秀れた人物を選んで派遣しているようである。だから行列が通る沿道の各藩の儒臣と詩や文章のやりとりをすることが多い。こういう儒臣たちの中には文才が長じていない者もときたまに見え、わが国の自慢とならないようで残念である。それはさておき、江戸、京都、大坂の三都では町人でも、ツテがあれば通信使の宿舎へ入って詩文のやりとりをしているが、おとがめがないので軽薄な連中が、われ先にと入り、宿舎の中は雑踏して、まるで市場のようである。下手くそな詩文をもって厚かましく韓人に接して行く。その甚しい連中になると、下手くそなせに百日も前から七言律詩の文をこね上げ、それを懐中にしのばせて、にじり寄り、平身低頭してそれを韓人に差し出す。それに一篇の和韻をつけてもらい、一生の光榮として、それを他人に自慢するなど、笑いたくなる。こういうことだから韓人客はそういう連中を蔑視し、数十篇もある詩を前に積み上げ、筆にまかせてこれに和韻を付けているが、中には声律をまちがえたり、韻をうまくふくんでいない詩がある。すると韓人は墨をつけて投出して返してくる。それを、にじり出て拾いとり、懐に入れて退出する者もいる。見苦しいこと、この上ない》  
——現代訳筆者

『韓人の和を書するに、文鎮の代りに脚を投出し、踵にて紙をおさゆるなど、狼藉至極のことなるを、有がたがりて頂戴するもあり、いづれも我邦の大耻、まことに苦々しきことなり、愚は宝曆の聘使のとき、客館

に見物に往しに、唱和の始まりである席を通りかかり、右のやうすはまのあたり目撃せり、苟くも志気ある者、誰かこの輩と伍して贈答に出べきや、故にたまたま正学真才の人ありても、是を愧て、初より韓人とは声息をたちたり、韓人は是を知らず、その接する所は往々右の如くなれば、渠をして日本に人なしなどいわせんことは、寔に嘆ずべきことなり』(原文のまま)

(韓人の文人は日本人が出した詩文に和を付するとき、文鎮の代りに脚を投出し、かかどで紙をおさえるなど、乱暴きわまりないが、その和韻をありがたがって、いただく者もあり、いずれもわが国の大耻であって、まことに、にがにがしいことである。私は宝暦(1764)の通信使のとき客館に見物に行つて、和韻の作業がはじまる席を通りかかつて、この有様を、まのあたり目撃した、いやしくも志気のある者であれば、だれが一体、このような連中と接して詩文の贈答をするであろうか、たまたま正学真才の人がいても、このような有様を恥づかしく思つて、はじめから韓人と接することをやめてしまった。韓人はそういうこととは知らず、日本には文人がおらん、といつておるが、まことに嘆かわしいことである)——現代訳筆者

通信使の中の文人たちの横着、無作法、狼藉ぶりが許せないという憤慨であり、そのような文人たちに平身低頭し、和韻をもらつて喜ぶ日本人への腹立たしさを述べている。

ついで、④の通信使の行列標識への不信心について。

『朝鮮は……我邦の学に暗きの虚に乗り、わが知らざるを欺て、道中の鹵簿に巡視の旗、清道の旗、令の旗をなど建ること、無礼の

甚しきものなり、巡視は領内を巡見するなり、我邦を渠が属国として、使者を遣はし巡見するの心なり、清道は道筋を掃除せよとなり、沿道諸侯の丁寧なる、掃除接待を忝と謝すべきことなるを却て使者の道筋をよく掃除せよと命ずるは何ごとぞや、令の旗は、我日本に号令するほどによくきけよとのことなり、清国よりの朝鮮に使者のゆくときは、定てかくあるべし、それを渠より我邦に施こし、公然として我を辱かしむること、憎むべきの甚しきなり』(原文のまま)

(『朝鮮は……日本人が学問に暗いスキに乗り、通信使の道中の鹵簿に巡視の旗、清道の旗、令の旗を立てておるが甚だ無礼なことである。巡視というのは自国の領内を巡見することである。わが日本を朝鮮の属国と見て、使者を遣わして巡見させているというつもりである。清道というのは道筋を掃除せよという意味である。沿道の諸大名は丁寧に道路掃除をしてくれているのだから、かたじけないと礼をいうべきなのに、あろうことか通信使の側から、掃除せよと命令するとは何事であるか。令の旗は、わが日本に号令するからよく聞けという意味である。清国から使者が朝鮮に行くときは(清国が宗主国だから)、多分このようにするのであろう。それを朝鮮からわが日本に命令し、公然と日本を辱しめるのは甚だ憎らしいことである)——現代訳筆者

『詰問せんに渠は陳じて、清道は行列の前駆の者、露はらいの心にて、かつて掃除を命ずる心に非ず、令は我一行の人衆に令する時の用にもたするにて、外国に令するには非ずとならば、くるしからずとも云べけれども、何ぶんに巡視は罪を逃るゝ所なかるべし、この無礼一つあるゆへ、その外も心

元なく思はる。もしいよいよ右陳ずる所の如くならば、前驅の者実によく露はらいをつとめ、又一行の人衆も、再三よく令しをきてすむべし、その旗を我邦城中に翻して、我人に見するには及ばざることなり、既に翻せば別に意あるに似たり、況や巡視の旗と同じく翻すに於てをや』(原文のまま)

《それを問いつめると朝鮮側は言訳をする。清道というのは鹵簿の行列の前驅の者が露はらいをするという意味であって、決して掃除せよと命令するつもりではない。令というのは朝鮮の一行の人たちに命令するということに用いるのであって外国の人に命令するのではない、というから、それならそれで、まあいいとして、巡視というのは、云い逃れはできません。この巡視という弁解不可能の一語があるため、ほかの清道も令も、疑がわしいものだ。もし右のように言訳をする中身が本当だとすれば(清道という旗など立てなくても)前驅の者に、気をつけて露はらいをするようにいつけておけば、すむことであり、また一行の人たちに命令をよく伝えておけば(令の旗を立てなくても)すむことである。それらの旗をわが国の城中にひるがえして、われわれ日本人に見せる必要はない。ひるがえして見せるというからには別に何か意味があるようである。まして巡視の旗と一緒にひるがえせば余計に他意があるように思う》——現代訳筆者

こうして眺めてくると、②朝鮮文人への不快感、③日本人への蔑視、④通信使鹵簿の標識への不快感など、いずれもその根底に「朝鮮属国使観」をひそめた偏狭な見解である。『草茅危言』『朝鮮の事』の論旨の中には、通信使の来訪を慶賀し、日・朝の修好を喜んでいる文言は一句もない。人士の交流を喜び、大使節団派遣

の苦勞をねぎらい、両国の親交親善に対し賛辞を表する個所は見当たらない。

⑤の経費に対する苦言に移ろう。

『元來叢爾たる偏邦の使介、たとひ今は属国に非とも、かくまで天下の財粟を傾けて、応接するには及ばざることなるべし、今日廟堂にこの弊をよくしろしめして、朝聘の期を姑く停させられたる、恐れながら寔に有がたき御ことなり』(原文のまま)

《元來、朝鮮は微々たる辺境の国であり、そこからやって来る使節は、たとひ今は属国ではなくても、これほどまでに天下の財費を傾けてもてなす必要はない。今日、幕府がこの弊害に気がついて、朝鮮通信使の要請をしばらく停止されていることは、まことに結構なことである》——現代訳筆者

『その諸侯に命ありて、往反の駅次供億の盛なるは、元來日本の豊富を示させ玉ふの意なるべきを、侯国にて追々取あやまり、韓使を重んじ、御馳走の盛なると心得らるるなり、困て承平以來、追々外を飾て内は窮せる侯国、この供億の大費に甚だ困しむこととなり来りけり』(原文のまま)

《幕府から諸大名に命令が出て、朝鮮通信使が江戸へ往復する駅々路次での饗応を盛大にしている。これは日本の豊かさを朝鮮の彼らに見せようというお上の意図なのである。それをとり違えた諸大名たちは、通信使を尊重するがための盛大な饗応だと思こんでいる。世の中が泰平になって諸大名は外見を派手に振舞っているが、内情は困窮しているのである。そこへ朝鮮通信使をもてなす莫大な費用が必要となり、甚だ苦しんでいる》——現代訳筆者

『しかし最早有来りたる故事なれば、今さら  
関を閉て謝絶することもいかゞなるべく、  
数年の後には、またこの典を挙させ玉ふべ  
きことならん、然らば旧式を大いに變じ、  
沿道侯国の疾苦とはならぬやうの御処置も、  
定めてあるべき御事と俯伏して待のみ』  
(原文のまま)

《しかし、すでに通信使の接受は、現実のよう  
に行なわれているのであるから、関を設けて  
謝絶するわけにもいきまい。数年後には、ま  
た通信使接受の式典は行なわれることであろ  
う。然らば従来のやり方を大いにあらため、  
沿道諸大名の苦勞とならないような方策がな  
にかあるものと期待している》

——現代訳筆者

## 5. 松平定信との接触

松平定信<sup>(27)</sup>(1758—1829年)は將軍吉宗の孫  
であり、田安宗武の三男である。奥州白河藩主  
松平定邦の養子となった。定信が幕府の筆頭老  
中となったのは1787年6月から1793年7月まで  
約6年間である。天明の大飢饉に見舞われた藩  
内農民の救済に奔走し、藩政を改革し財政を引  
き締めた。その手腕が買われて幕府の筆頭老中  
に抜擢された。田沼意次の失政のあとを引きつ  
ぎ、所謂「寛政の改革」を断行した敏腕政治家  
であった。一方、自ら楽翁、花月翁と称し、花  
鳥風月を愛した風流の人としても知られている。

定信就任の前年、1786年には所謂「天明の大  
火」が江戸に起こり、就任の翌年に、即ち1788  
年には京都に大火があり、御所および二條離宮  
が被害を受けている。

中井竹山が松平定信に会ったのは、この京都  
大火の翌年の1789年(寛政元)のことである。  
定信は京都大火の事後処理のこともあり、就任  
挨拶も兼ねて、この年、京都を訪れ、その忙し  
い旅程の一日を割いて竹山と面談した。

かねてから大坂に儒者・中井竹山がいること  
を知っていたのであろうか、幕府側からの名指  
しでこの面談は実現している。

この年、まだ竹山の『草茅危言』全5巻は完  
成していなかった。完成はこの2年後の1791年  
のことである。竹山はこの面談後に直ちに、そ  
れまでに出来上がっていた何巻かを定信に献上  
している。「朝鮮の事」を書いている第2巻は、  
すでにこの時期に松平定信の手に入っていたは  
ずである。

定信と竹山が直接会ったのは、この1789年の  
1回だけであるが、やがて完成した『草茅危言』  
の総てが定信の筆頭老中の期間中にその手に届  
けられており、竹山から意見の具申、その他の  
著作物の献上などが、その期間中に、続けられ  
ていたようである。

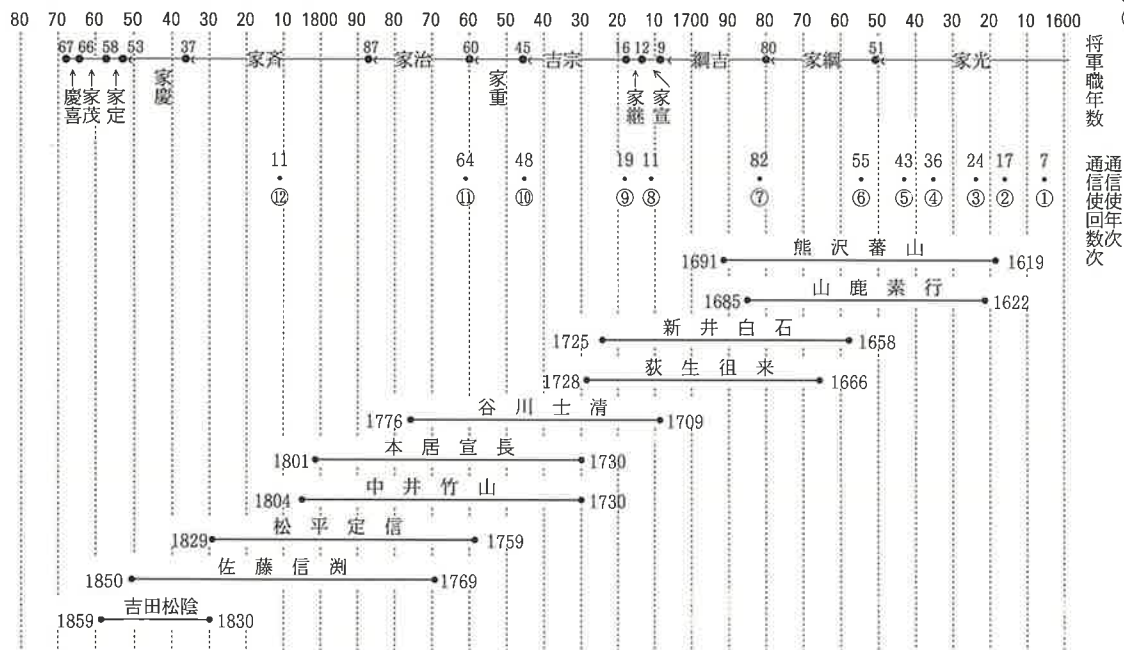
この松平定信と中井竹山の出逢いは例の「空  
白の24年間」の4年目の出来事である。「空白  
の24年間」というのは將軍家斉が就任してから  
24年間も、その就任祝賀の朝鮮通信使の来日  
がなかったことを筆者が仮りに、そう名付けたも  
のである。

別表①を見ていただきたい。將軍就任とか將  
軍の嗣子誕生など通信使派遣の事情が発生して  
から実際にその通信使が来日するまでの期間は  
1年—4年となっている。「空白の24年間」の直  
前の通信使、即ち將軍家治の襲職祝賀のための  
第11次通信使は3年後に到来しているのである。

中井竹山が松平定信と会ったのは將軍家斉が

(27)『日本大百科全書』22、小学館、1995

表②



就任して4年目である。従来のケースを考えると、遅くとも襲職祝賀の通信使が来日する時期であった。

勿論、日本国内の事情は前述したように悪かった。大火、凶作、社会暴動、幕府財政の不如意、それに外国から押し寄せて来る通商要求の暴力沙汰等々。幕府としても通信使派遣の要請を朝鮮側に出すことにはためらいがあったはずである。

そういう思案の時期に、朝鮮属国史観をまっ向うから振りかざし、通信使文人を非難し、一行の鹵簿がわが日本を侮蔑する、との論旨を盛り込んだ著作物を直接、幕府の最高要職者に手渡した中井竹山の影響力は絶大であったと思うのである。

この定信・竹山の面談から22年後に、家斉襲職祝賀の第12次通信使が来日し、対馬で接待を打ち切り、以後の通信使は廃絶となった。

## 6. 結 論

中井竹山の『草茅危言』を取り上げ、そこに織り込まれた華夷思想を詳しくながめてきた。これが朝鮮通信使の接待の簡略化、ひいては廃絶へと進む幕府の政策に少なからぬ影響を与えたことは必定である。

しかし、華夷思想の持ち主は中井竹山だけではない。前後に多数算えることができる(別表②を参照)

竹山よりも以前に深く広く幕政に関与していた新井白石(1657-1725)は朝鮮通信使の態度は甚だしく信義を欠くものであり、その遣使は実は「間諜之使」であり、文事をもってする復讐行事であったと述べている。

即ち、豊臣秀吉の軍が撤退した後、来援していた明国軍がそのまま朝鮮に駐留し、その横暴

に苦しめられていたとき徳川家康から和平の申入れがあった。それによって朝鮮は救われたのであるから、日本に恩義を感じなければならないのに、それを忘れて恥づるところがない、とその著、『国書復号紀事』に述べている<sup>(28)</sup>。また明に対しても同様に、秀吉軍の侵攻の際、援軍派遣など大恩を受けたのにもかかわらず、明・清交替(1644)の時、清に攻められた明に対して一人の援兵さへも送らなかったとその著書『攷事撮要』で非難している<sup>(29)</sup>。

「間諜之使」というのは日本が再び外征の軍を起こす気配はないか否かを探る目的の使臣のことであり、また「文筆をもつての復讐」というのは、寛永以来、日本に対する国書に「日本国大君」という称号を用いているが、大君というのは朝鮮では国王の臣下に対する称号であり、徳川將軍を文書の上で家臣扱いにしている、と非難している<sup>(30)</sup>。中井竹山がその著『草茅危言』において通信使文人が不様であり、日本人を侮蔑している、と憤慨する視点が一致している。

華夷思想の最たる者としては山鹿素行(1622-1685)をあげることができる。その著『中朝事実』<sup>(31)</sup>において次のように述べている。

『神功皇后が親ら三韓を征し玉うて〔三韓は〕八十艘の貢物を奉り船楫を乾さず』と誓へり。……〔韓人池を掘らせ給うたのは〕外国降参いたせるとき長く乾坤(天地)とともに伏して〔天皇の〕飼部にならむと住吉天皇(神功皇后)に誓ひたりしるしのしわざごと也……』と。

中井竹山の『草茅危言』の記述と同様、すべて日本書紀神功皇后紀を無批判に引用した記述

である。

山鹿素行の他にも中井竹山の前後の華夷思想の持主として、熊沢蕃山(1619-1691)、荻生徂来(1666-1725)、谷川士清(1709-1776)、河村秀根(1723-1776)および佐藤信淵(1769-1829)、吉田松陰(1830-1859)らをあげることができよう。いずれも前述したように神功皇后紀の無批判な信奉者たちである。(別表2)

日本書紀はその内容が虚偽と作為に満ちた歴史書ではあるが歴きとした官撰史書であり、古くからその講書と研究が広く人士の間で行なわれて来た。釈日本紀によると、最初に公式の講書が行なわれたのは奈良時代の721年。その後は821年、839年、878年、904年、936年、965年の合計7回に行なわれている。1回が3、4か月もかかる大規模な国家行事としての講読会であり、当時の知識層がこれに参加している<sup>(32)</sup>。

その後も継続して行なわれ、鎌倉、室町時代を通じて、主としてその神代篇=第1、第2巻=を中心に研究が進み、江戸時代になるとその研究、講義は更に活発になった。江戸時代はいわば文芸復興の時代であり、この時流に乗って考証の学風も生じ、優秀な注釈書が出版された。

日本書紀の講書が普及するにつれて、虚偽と作為に満ちた朝鮮蔑視観が人々の間に広がり、同時に日本的華夷思想が根づいて行くのである。やがてこの思想傾向は明治維新になって征韓論となり近隣諸国への侵攻の心の根拠となるのである。

(28)小堀一正『近世大坂と知識人社会』清文堂、1996

(29)宮崎道生「新井白石の朝鮮認識及び日鮮外交観」(『新井白石の研究』吉川弘文館、昭33)

(30)上に同じ

(31)『折たく柴の記』中巻、正徳元年条(『日本古典文

学大系95』岩波書店、昭39)

(32)『中朝事実』山鹿素行全集刊行会編・帝国式徳学会出版、1916

(33)直木孝次郎「日本書紀風土記」(『鑑賞日本古典文学』第2巻)

この稿を終わるにあたり、吉田松陰（1830－1859）の言葉を引用しよう。松陰は積極的な日本の華夷思想の信奉者であり、その私塾から巣立った俊英たちは明治維新政府のアジア侵攻に大きな力となったことは周知の通りである。

『幽囚録』より

『……善く国を保つものは徒に其の有る所を失ふことなきのみならず、又其の無き所を増すことあり。今急に武備を修め、艦ほぼ具はり礮ほぼ足らば、則ち宜しく蝦夷を開墾して諸侯を封

建し、間に乗じて加模察加・奥都加を奪ひ、琉球に諭し、朝覲会同すること内諸侯とひとしからしめ、朝鮮を責めて質を納れ貢を奉ること古の盛時の如くならしめ、北は満洲の地を割き、南は台湾・呂宋の諸国を収め、漸に進取のを示すべし……』<sup>(34)</sup>

松陰が「…朝鮮を責めて質（人質）をとり貢（貢物）を献上させること、昔の盛時のごとくあらしめよう……」という所論にその対朝鮮観を見ることができる。（完）

(34) 『吉田松陰全集』第1巻350頁、山口県教育会編、

岩波書店、昭15